

天竺

kuroric

日本の常識に言うところの「河」ではない。「大河」と言えばまあそうかとも思うが、もともと「大河」という言葉があってそれがこの河に当てはまるというよりは、この河を初めて見た人が「河」という言葉ではとても形容しきれないと散々悩んだ挙句に仕方なく「大河」と呼んでみた、という方が正しい気がする。ガンジス川は、それだけ広い河だ。安価で頑強な鉄が作れるようになるまでは、橋を架けようという発想すら生まれてこなかっただろう。

バラナシは栄えた町だ。今の時期はさほど見ないが、オン・シーズンには観光客も多いのだろう、ホテルやレストランなど、サービス業も比較的発達している。それでもインドはインドであって、牛や犬が道を占拠しているし、迂闊に歩いていると人力車の車輪に足を轆かれそうになる。宿はインドにしてはいい宿だったが、羽虫がわんさかいるのは変わらなかった。日本から持ってきた虫除けスプレーの絶大な威力に感動するのはもう数回目だ。

昨日は火葬場を見に行った。人の死体を燃やして灰を河に流すという、もはや旅行者の間では定番となったスポットだ。特に感慨はなかった。生まれてから今まで、身近な人の死を見たことがないからかもしれない。何の感情も引き起こさないだけに、ずっと見ていられる光景でもあった。

今は橋を渡っている。乾季のガンジスは、河面の3分の2ほどが干上がっている。これだけの広さの土地があれば、W杯とオリンピックが同時に開催できそうだ。ぬかるみをよけたバイクが私の脇をすれすれで通る。

おそらく30分以上はかかって橋を渡り終えた。遠く上流にもう一つ別の橋が見える。河岸を歩いてあの橋まで行き、渡ってもといた岸に戻ろう。私は歩き出した。

こちら側はもといた側と比べて随分とのんびりした雰囲気である。駅が向こう側にあるからだろうか。サービス業どころか、貨幣経済進展以前といった雰囲気だ。白く乾いた道路に鳥が数羽、母親が世話をしている。子供たちが私を面白がって寄ってくる。

煉瓦の家が並ぶ小さな通りを抜けると、道がだんだん細ってくる。あたり一面に膝くらいの高さの草が生えている。右に行ったり左に行ったりして、なんとか歩けるところを探していたが、ついに人の家の庭と思しきところに紛れ込んでしまった。

中年の男がこちらに気づいたので話しかけて道を尋ねると、この先に道はないという。センキューとこちらが礼を言うと、相手もにっこり笑ったのに驚いた。一週間前にいたコルカタではみな無愛想だったからだ。センキューと言って無視されたこともある。聞こえなかったのだと信じたいが。

道がなければ仕方がないので干上がった元・河底に降りることにした。草をかき分け、細い茎の先に小さな黄色の花が泡のようにいくつもついた植物を横目に、河に降りる。降りてしまうと、あたり一面に砂利を除いて何も無い。遠くに目をこらすと、もといた街並みや沐浴場が見える。沐浴場まで行けば渡しの舟があって、乾季でも干上がらない部分を渡れるはずなので、そこを目指すことに決める。

凧揚げをしている子供達の姿がある。確かに、このロケーションは凧揚げに最適だろう。走りながら下を見なくてもつまづくようなものはない。凧糸が引っかかるような電線や屋根もない。凧揚げの子供達の横を通り過ぎてからは、歩けども歩けども単調だ。後にした子供の声も、向かっている街の喧騒も、まるで水の中から聞いているように、遠くからぼんやりとしか聞こえない。沐浴場の人影は、一向に大きく近づいてこない。かと思うと、動物の骨が突然転がっていたりしてぎょっとする。人間の骨ではないことを確認して、通り過ぎる。

ふと、私はこのまま何万年も歩き続けるのではないかという錯覚に襲われる。今までも何千年も歩き続けて、それでも辿り着かず、これからも永遠に歩き続けるのではないか。立ち止まって上を見れば、青い空に黒い鳥が円を描いている。それがだんだん、淀みに泳ぐ魚のように見えてくる。もしあれが魚なら、私はそれを水底から見上げていることになり、死んでいるのかもしれない。そういえば今いる場所は普段は水の底だ。私が歩いている間に雨季が来て、増えた河の流れにいつの間にか押し流されていたのかもしれない。それに気づかず、私は未だに歩き続けているのかもしれない。あたりに動物の死骸しかないのも、人の声がどこか遠くからしか聞こえないのも、そうだとすればすべて合点が行く。

旅とは、重い荷物を捨てて先を目指す過程だ。日本人であること、大学生であること、どちらかといえば裕福な家庭で生まれ育ったこと、長男であること、そういったものは今までの旅ですべて捨ててきた。重くて邪魔だったからだ。今、ガンジスの水底で、人間であることも、生への執着も、その気になれば捨てられると知った。きっとこの同じ感慨が、インド人の、少なくともバラナシの人の核としてあるのではないだろうか。全てはガンジスに還る。だからガンジスに委ねよ。

死体をはじめ、インド人がありとあらゆるものをガンジスで洗い流すことも、最終的にはガンジスが全てを引き受けてくれると思っているからなのだ。生き馬の目を抜くコルカタの街にはないバラナシの余裕の底には、ガンジスという母がいるのかもしれない。日本に帰って生きている今の自分すらも、ガンジスを心に抱いて生きている。余裕を失った時、いつも思い出すのはガンジスの橋の長さ、水底から見た鳥の腹だ。

気づくと、私は渡し舟の上で息を吹き返していた。その日の日記にはこうある。「俺には何も分からない。神様にはなれない。だから死ぬまで生きてみよう」

(おわり)

All Rights Reserved.

天竺

<http://p.booklog.jp/book/107967>

著者 : kuroric

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kuroric/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/107967>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/107967>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ